
聖なる夜と落とし者っ！

椿 によき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なる夜と落とし者っ！

【Nコード】

N3583C

【作者名】

梶 によき

【あらすじ】

ごく普通な少年のところへ落ちてきた、不思議なサンタ見習い少女。彼女は突然居候すると宣言！そこから始まる夢い日常と、夢い約束の物語。

プロローグ

悪夢は突然、降ってきた。

にわかキリスト教信者が激増するその夜、とくに何をするわけでもなくクリスマス・イブという行事を流していた少年。彼は十五年間培ってきた常識を、一瞬にして破壊された。さらに儚い常識を叩き壊して居候宣言までしたサンタの少女に、平凡な日常さえ奪われる。それは絶対絶望の状況で、生きていることを悔やんだくらい。

少年と居候は敵対心（別名・殺意）を抱きながらも笑顔で、当たり前障りないようにお互いが気を使いながら暮らし……………たいです。けれど現実、一方的に少年が気を使っています。誰か助けて！

そんな哀れな主人公の名前は中井斗助。

運動、勉強ともに優秀であり、そしてさらに眉目秀麗という完璧な中学二年生。

もちろん、僕です。

これは、多分正しいと思われるでいた常識を木っ端微塵に砕かれたあの夜に始まった、変えられない運命の物語。

それは、そう。十二月二十四日、聖なる日の前夜のこと。

惨劇は（なぜか）幕をあけ（てしまい）ました。

その1つ！ 落下物と色々

今日はクリスマス・イブ。

なんだか物凄く嫌な予感を感じる今、僕の視界には嵐の前の静けさ的な、神秘溢れる世界が広がっている。聖夜前に相応しい澄み切った風に、透明な夜空。そこに浮かぶ数多の星と、ひっそりと光を放つ三日月が、暗いだけの夜空を優しく彩っている。

冬休みの序盤、僕はまったく進まない宿題を放置、毎日をだらだらと過ごしている。

ふと、終業式以来会っていないクラスメイトのことが頭に浮かんだ。今頃クラスの仲間たちは、各自家族でイブのパーティーとかツリーの飾りつけとかやってるんだろうな。我が家では最近、クリスマスなどの行事を全てやらなままにしている。端午の節句なんて僕が幼稚園を卒園した途端に中止となった。息子の成長をもっと願えよ！ そう言えば、小学校まではツリーお飾り労働会やらクリスマス会なんかがあって、放浪癖のある両親がいなくてもそれなりに楽しいクリスマス・イブだった記憶がある。

ただの冬休みなのに遠い目をしてどうするんだよ！ 僕！

自分に突っ込み、視線を空へと戻す。そこには相変わらず闇とわずかな光があつた。

「あ……」

今、ほんのちよっぴりだけ切なくなったのは、きつとで夜空がこんなに綺麗だから……というのは嘘で、冬休みも残りあとわずかなのに宿題がなかなか進まないからだ、きつと。少し気分が暗くて重いのは、確実にそのせいだが。

「ふう」

肺に溜まった息をそつと吐き出せば、それは真っ白く凍り付いてす

つと闇へ溶け消える。

現在時刻は午後九時半。

まだ雪が降らないこの地域。いつもクリスマス三日前まではイルミネーションが輝いているのに、当日になると一斉に電球が切れる商店街。そしてその代わりと言わんばかりに点滅を開始する街路灯。毎年同じで、いつまでも変わらないこの風景に涙さえ感じてしまう。感じてしまうけれど、そろそろ町を見下ろすのに飽きてきた。

また、闇を見上げる。

視界には、空気が澄み渡っている夜空がさつきと変わらず広がっている。切なさを混ぜた視線を遠くへ投げれば、薄っすらとした山の輪郭が見えた。今は闇と同化した濃緑の山。午前では見られない新しい木々の姿は、威風堂々としていても感動する。風が吹き、思い出したように寒さが体中を駆け、ぶわっと鳥肌を作った。

綺麗な夜空、濃緑の山。なぜかそこに、自然界にはありえない真紅の物体が浮かんでいるけれど、それはそれで素晴らし………いい？

くない！（否定）全っ然素晴らしくない！

ってかアレは一体なに？

あまり、というか思いつきり信じたくない光景に、しばらく言葉を失った。

けれど黙ったところで現実が変わるはずもなく、謎の物体は落下を続行。僕と未確認浮遊物体との間隔は、わずか数十メートルまで縮んだ。

そしてあと三十メートル、二十三メートル、十五メートル

「やつぽお

い！」

今のは僕の声ではない。

「こらくクロス！ 待ちなさい！」

これも僕の声ではない。

サンタクロースのような恰好をした女の子は、すでに僕の五メートル前に浮いていた。

「ええっ！　ちょちょちょ、ちょっと待った！　……ぐおえっ」

制止を掛けたがすでに時遅し。

重力に引つ張られてきたサンタは、空中でひらりと身を翻すと見事に受身の姿勢をとる。そして僕の顔面に背中から着地。華麗に僕へ直撃したサンタは、僕の首をあまり一般的ではない方向へと曲げた。驚きと激痛に、一瞬息が出来なかった。

「ぐはっ、ぶはうあのつすみません、少しどいてくれませんか」

体育でやる馬とびのような姿勢の僕は、とにかく息苦しかったので声をかけて首をまわした。すると、バランスを崩したのかサンタクロースの少女は僕の背中からずり落ちて、くるりと丸まると僕の足元へ落下しはじめた。ごちゃごちゃと鋭利なものが無造作に置かれているベランダ。このまま落ちたら間違いなく死んでしまう！　そう思い、僕は咄嗟にその辺の障害物を退けて少女が無事に降りられる場所をつくった。けれど……

「ええええ！　ねえ君は天邪鬼か何かですか？」

少女は、丸めていた背中をピンと伸ばし、鉢植えに頭を向ける体勢になってそのまま……。

「そこにはまだ、まだ鉢植えがあああっ！　待つて待つて待つて

とりゃ

「きゃんっ！」

慌てて僕は手を伸ばし、少女を支えようとしたけれど……結果は無残だった。サンタクロースの少女はその小さな頭で……鉢植えを叩き割った。

マゴバキンッ

マゴバキン、なんて音聞いたことがないけれど、あえて擬音で表すならこんな感じだ。

（注意　状況の説明がすごく長くなったけど、これは全て数秒間の

出来事です)

じわり、と少女の頭から血が出るはず……僕はそつと目を閉じた。できることなら気絶したい、と思った。しかしどうやら僕の神経はそこまで弱くなかったらしく、しばらくの後ゆっくりと目を開けた。

が、またすぐに閉じた。

視界に入ってきたのは、ほとんど怪我もなく僕の顔をまじまじと見詰めるさっきの少女。

その子は、赤と白を基調とした百円均一で(少し高めに)売っているような、半そでのサンタ服を着て、観葉植物と土と破片が付着した白いばんぼん付きのトンがり帽子を右手で押さえている。(真っ白な頬にかすり傷があったが、それは絶対自業自得)その帽子から零れ落ちる、鳶色でセミロングの髪の毛は、可愛らしく二つ結びにしていた。

じつと互いを見詰めたまま、無言で時を流す二人。

「へくしゅっ！」

沈黙を破り、少女がくしゃみをする。

当たり前だよ、ま・ふ・ゆ！

大体そんな服装で日本の十二月の空を飛んだら、絶対に風邪を引く。こいつはニュージーランドから来たのかよッ！ あ……ニュージーランド、か。少し前に地理で習ったところだ。日本と季節が反対の小さな国で、確か羊がたくさんいたはず。真夏のクリスマスマスがあって……なら真冬の海水浴とかあるのかな？ いつか訊いてみよう。じゃなくて。

悪夢のような出来事に、つい現実逃避をしてしまった。

そして僕は今、非現実の世界へと独走中。

これは人生初の経験であり、できれば一生したくない種類の経験だった。

「つてええええ！」

僕が考え込んでいる間に少女は「寒い寒い」とかなんとか呟きながら、僕の秘密世界でもあるマイ・ルームへと入り、あるうことか鍵を閉めようとしていた。

もちろん、笑顔で。

「待ちやがれこの野郎おおおお！」

慌ててガラスにへばり付き、渾身の力でそれを阻止。間一髪のとこ
ろで閉め出しを免れた。

…… やたらと冷たい室内。

それもそのはず、ここには暖房器具が一切ないのだ。（こんど親に
抗議しよう）

さておき、いきなりやってきた落下少女…… どうしたらいいんだろ
う。て言うかなんでよりにもよって僕の家に来たんだ？ とりあえ
ず話し合おう。相互理解には会話が重要だ。

「き、君は一体なんなの？」

緊張して声が裏返る。

謎の少女は極めて明るく、けれど聞くほうを暗くさせる返事をくれ
た。

「ボク？ 見習いサンタのクロスだよ？ サンタの国から降りてき
ましたっ！」

「サンタ……！？ 現実にはいたんだそんなの…… だったらほら、サ
ンタクロースがこんなところにいたら駄目だからお家に帰ろう？
ね、ね」

帰れーと視線で圧力をかけながら僕は言った。帰ってほしいという
淡い願いも込めて。
しかし。

「えー、無理だよ…… まあ落ちちゃったのはお互いの責任だし」
ついさつき『降りてきた』って言ったの誰でしたっけ？ しかもこ
いつ、さりげなく僕に罪を擦りつけていません？

どうやらたった今、コイツとの間に話し合いでは解決できない（か

なり重要な）問題ができてしまったようです。

久しぶりに女子へ殺意に近い感情を抱いた僕は、けれど極めて控えめに、

「どうして僕まで悪くなるんですか！」

擦りつけられた罪を押し返した。

「だって君があまりにも物欲しげな顔でベランダに立っていたから、てつきり君が……」

そう言つて、真っ赤に頬を染めるサンタ。今の発言のどこに照れる要素があるんだよつ、と突っ込みたかったが必死に堪える。

なぜか？

こいつには何を言つても通じないから。

かくして僕の素晴らしい平凡は簡単に奪われてしまったのであった。同時に、新たな悲劇まみれの日常が始まった。

その2つ！ 落下物とカレー

翌朝。

真冬だというのに元氣よく空を飛びまわる雀。そのやたらとでかい鳴き声によって僕は夢の世界から引つ張り出された。

陽光はカーテンによって遮断されているため、室内はシンと薄暗い。さらに、かなり寒い。

今日はクリスマス。いつもならとくに何をするわけでもなく普通に過ごしているこの行事も、サンタの少女がいるおかげで、気分は不思議とクリスマスに。

「ふああ、んぐー」

布団を押し上げて伸びをすると、刺すような冷たさが全身を駆けた。同時に鳥肌が立つ。あまりの寒さにふるふると身震いすると、僕はまた布団へ潜り込んだ。

今日が冬休みだということにこの上ない感謝を。

両手を合わせ、足を水泳のばた足のごとく動かすという僕流『感謝の舞』をし、さあ再び眠りにつこうとしたその直後。僕の布団が物凄い勢いで剥がされた。

つつつーと入り込む真冬の空気。

「おはよう！ おはよう！ 起きてーほらっ！」

と騒ぐサンタの少女。僕はそれを押しのけようとして……クロスの服装に啞然。

……そして絶叫。

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

サンタの少女も便乗し、クリスマスの朝、僕らの変な合唱が冷たい空気を震わせた。

「ってなんでクロスも叫んでるんだよ！」

「え？ 朝のあいさつだよ？」

「え？ あれが挨拶なの？」

うん、と元気よく首を縦に振るクロス。サンタの国では朝っぱらから叫びあうそうです。

「ここは人間の国なんだから朝は静かに挨拶しようね。それと、って人の話、聞いてる？」

僕の声を華麗なまでにさりりと無視して、クロスはどこか切ない表情になった。そして自分のやたらと細い腹部をちゃんとタッチ。

「とりあえず、ご飯作って」

鳶色の髪を揺らし、かわいく命令した。

「わかったから、とりあえず服を着て」

僕は苦笑して着衣を命令した。ちなみに今、クロスは下着に毛布というとても奇妙かつ………まあいろいろな服装。このままだと、このままだと！

（大量の小さな僕たち「ウウ

！」）

（僕「落ち着こう、まずは落ち着いて。災害のときは落ち着くのが一番さ！」）

「ねえ、なんでで服を着てないの？」

「暑かったもんで」

怖いくらいにつこりと、サンタの少女は言った。

若干の沈黙、そして

「そうだ！ ぼく、今日からここに暮らすね」

「ふーん。って……え？ 何だって？」

「そうだ！ ぼく、今日からここに暮らすね」

「……え？ 何だって？」

「ぼく、今日からここに暮らすね」

涙が一筋、頬を伝う。

「ああ、まさかこの歳で生きてることを悔やむ羽目になるなんて」

「なに言ってるの！ 生きてるから人生楽しいんだよ！」

「黙れ、僕の後悔の元凶」

今日は聖なる日……これじゃまるでクリスマスプレゼントだ。朝起きたら変なのがいて、いきなり居候宣言をするという世界最悪のプレゼント。ねえ神様、僕の行いはそんなに悪かったんですか？ だったら普通に石炭くださいよ。石炭の方がよっぽど嬉しいんですけど……

ねえ神様！

悲痛な叫びは、冷たい空気へと消えてしまふ。

幸い、僕の家には大人は一人もいない。あと二日間だけいないので、その間にこいつをなんとかする必要がある。旅行好きの両親は、なぜか息子を置いていき、四泊五日の旅へ。そのため、今は僕がこの家を守っているということになっている……のだが。ごめんね家族よ！ 僕は城を守りきれずに、あっけなく侵入を許してしまった頼りない兵士です！ 帰ってきたら、ぜひこの侵入者に驚いてください！ しかも今日から居候としてこの家にとり憑くって言いだしてます！

とりあえず、腹がへっては戦も出来ないので文句と涙は飲み込んでキッチンへと向かった。

朝食は簡単にトースト・オン・バターと牛乳で済ませる。侵入者が朝食のメニューを眇め見ながら、非常になにか言いたそうにしていたけどそんなことに気にしない。もちろん、ご意見ご感想も一切受け付けはいたしません。

昼食も夕食も、トースト・オ（以下略）にしようと思ったけれど、それではさすがに僕の体が持たないので……

「ねえクロスー、昼ごはんは何が食べたい？」

一応居候の意見も参考にしよう。

「ミミズとローネ！」

サンタの少女は、意味不明かつ理解不能単語を発射。それは見事に僕の頭脳へクリティカルヒット、僕は激しく混乱した。

「なにそれっ？ この世にないよそんな料理は。ってか誰だよローネって！」

「呼び捨てちゃダメ！ ローネちゃんは英雄なんだから。サンタの国に伝わる童話なんだけどね……ローネちゃんは、あのすごく有名な裂いて食べるチーズを極限まで裂こうとして神経衰弱に陥った少女なの」

「悲しいよ、その子！」

クロスも僕もそのおバカな少女に黙祷を捧げる。どうか、安らかに……じゃなくて。

「ねえクロス、結局君はなにが食べたいの？」

「ミミズとローネ」

「だからなにそれ！ 聞いたことないよそんな料理」

「でも現実あるんだよ？」

「でもサンタの国の食べ物人間の国にはないんだよ。だからね、ほらこの本とか見てさ」

レシピブックを渡し、必死に説得しようとしても、サンタの少女は「あるあるー絶対あるんだからー」と言っただけで聞く耳を持ってくれない。

「サンタの国にいる時、お母さんがミミズとローネを作ってくれたもん！」

「あのね、こつちの世界ではミミズなんて食べないの！」

「え？ それにはミミズなんて入ってなかったよ？」

「はい？ じゃあなんでミミズとローネなの」

「うーん知らない。でも大豆とトマトが入ってたよ？」

「それってさ、あれだよな」

討論すること約三十分……ようやく結論が出た。サンタの少女は、『ミネストローネ』が食べたかったらしい。間違え方が幼稚園児レベルだ。失笑とともに訪れた気まずい沈黙。

「よし、じゃあミネストローネの材料を買いに行こうか！ どうする、一緒に行く？」

あまりの気まずさに、とりあえず話題を切り出してみる。

「えー！ みねすとりおねの気分じゃなくなっちゃったよ、もう。

今度はうらめし屋で、きもだ飯が食べたい！」

おいコラこのクソサンタ……………

「あああ！ また意味が解らないことを言う！ じゃあ今日はコンビ二弁当ねっ！」

やだやだーと駄々をこねるサンタの少女を引きずり、僕は玄関を出た。

そして今。

僕はひたすら店員さんたちに謝っている。なぜかって？

始めから説明しよう。

僕とクロスは徒歩で最寄りのコンビ二へ行った。しかし自動ドアに驚いて店内に入れないアホサンタ。これはこういうものなんだと説明したが、理解を得られず挫折。結局行き先を変更して、隣のスーパーへ行くことにした。そこまで来てクロスは引き戸を押し開けて破壊。防犯カメラもついでに壊させて、僕とクロスは疾走した。けれど見つかって、謝っているというわけだ。

「本当にごめんなさい、ほらクロスも謝るの！」

「やだー」

「やだじゃないの！ 壊したのはクロスなんだから」

「だってぼく、これくらい直せるもん」

「……………」

ん？ 今、なんて？ 僕の記憶が正しければ、サンタの少女は直せると言っただけ。

「じゃあクロス……………直してくれる？」

「きもだ飯、作ってくれる？」

条件付きらしい。後でもだ飯とは一体なんなのかを聞いておこう。
「いいよ、よくわからないけど頑張って作る！ 作るから直して！」
僕の頼みにクロスは大きく頷いた。（まるで幼稚園児）そして、
さつと首をあげるとかわいらしくターン、ぴよいぴよいと空中でス
テップを踏み、片手を腰にあてた。最後に、さらりと揺れる鳶色の
ツインテールをふあさつと空中で旋回させ……

「さけてとろけてかるしうむ」

謎の呪文とともに、割れたガラスたちは一斉に集結、元の形へ戻る。
そしてきらきらと輝きながら鉄製の枠にピタリと収まった。はい、
完成。

「ほら出来た。これできもだ飯……あーどうしょ？ また気分が
変わりそう！」

「……………ば、僕は……………」

非現実的すぎる光景に言葉を奪われたが、慌てて取り戻す。

「僕は今、初めてクロスがサンタに見えたよ……………」

「いやだなあ！ ぼくはいつでもサンタだよ？ そんなことより、
大変だよ！ 今のこの大変さを例えるなら、ローネちゃんの映画が
絶望後悔中って表示と共にCMになっちゃうくらい！ だから、どー
なつてよりカレーを食べなきゃ！」

いきなり何を言い出すかと思ったら、メニューの変更だった。

「絶賛公開中じゃないのかな、それは。お昼はカレーね。もう変え
たらだめだからね！」

笑顔で念を押し、僕はクロスの手を引いて本格的に買い物始める。
先ほどの魔法みたいな光景の余韻が残る入り口、それとあっけに取
られたままの買い物客。背中に店員さんたちの奇妙な視線を感じた
けど、そこは敢えて無視。気にしないの術で通そう。

青果コーナーに並ぶ色とりどりの野菜を見て、興奮気味のクロス。
目が少女漫画のごとくキラキラと輝き、「かるしうむ」を感極まっ

たように連呼。お客さんの目を引き、僕だけが羞恥で真っ赤に染まった。

「あれえ？ 斗助、顔がトマトみたいだよ？」

さりげなく失礼なことを言うクロス。

「ってクロス、なんで僕の名前を知ってるの？ 名乗った覚えなんてないよ、僕！」

「制服の……名札に書いてあって、それで……」

急に暗い表情になって、クロスは言葉を紡ぐ。

「いつ見たのツ？ へ？ あ、いや、そんなに気にしないでいいよ？ ていうかむしろ気にしないで？ 僕は別に名前で呼ばれても嫌じゃないし、ね？」

必死で言葉をかけたのに、サンタの少女は僕の前からいなくなっていた。

これじゃあ僕、独り言じゃん。

そんなことを考えていたら、クロスが買い物カゴへ大量に野菜を放り込んできた。赤、白、黄色ってチューリップですかこれは？

「なにやってるのさ！ カレーを作るんでしょ？」

カゴを埋め尽くす、レタス・キャベツ・メロン・イチゴ・キュウリ……その他いろいろな青果たち。その非常識度は絶句級。なんだかステンドグラスみたいだ。冬にキュウリがあるとは、世の中も進歩したんだなあ。

ぼーっとカゴを見詰める僕。その後頭部を思いっきり引つ叩き、クロスが叫んだ。

「カレーには、あとサクランボが必要だね！ ねー斗助」

満面の笑みで、後頭部をさする僕に同意を求める。

「いらないよそんなもの！ 大体カレーには入れない野菜ばかり持ってきて、にんじんとかじゃがいもとかそういう基本的なものが一つも無いじゃん！」

「んもう！ 基本とか常識とかにとらわれちゃ、ダメー！」

「なんでそーなるの？ 大切だよ常識は！」

叫ぶ僕を置き去りにして、クロスは果物の棚へと激走。サ克蘭ボを持ってきて、カゴに投入した。

もうあきらめよう。それが一番。そしてカレーが完成したらクロスに全部食べさせよう。

どんどん重さを増していく薄灰色のカゴに、いい加減泣きなくなってきた。

「ほらクロス、カレールウを買わなくちゃただのスープになっちゃうからさ、そろそろ野菜はやめてくれる？ このままじゃ一週間分の野菜が摂れちゃうよ？」

「チーズ」

「は？」

「……チーズがないカレーなんて、麺がないラーメンと一緒に！ そうとなったら善は急ぐ！ まずはかるしうむを！」

麺がないラーメンって……例え方が必要以上に大袈裟だ。ご飯がないカレーの方が的確な例え方だと思う。

それと、『善は急げ』の使い方が間違っている気がするんだけど、それは気のせい？

場面は変わって乳製品売り場。

「決めた。ぼくは裂いて食べる棒状チーズを極限まで裂くよ！」

「待って待ってよクロス！ それってローネちゃんがずっと前に挑戦して神経衰弱に陥っちゃったあれでしょ？ やめなよそんな危険な遊びは！」

絶対やつちやだめだよ、と言おうとした僕の口は牛乳パックを押し込まれて塞がれた。

「へえうおふ！ ほえふおはふひいへ！ ふいきゆいかへきはいにょ！」（ねえクロス！ これをはずして！ 息が出来ないよ！）

注意 両手は買い物カゴと野菜で塞がっているため、自分では取れないのです

もごもごと呻くことしかできない僕の目の前に、サンタの少女はびしいつとカッコよく親指を立てた。

「遊びじゃない！ 裂いて食べる棒状チーズを極限まで裂くっていうのは、円周率を何億桁も暗記するのと同じくらい大変で、フェルマーの最終定理以上に難しいんだよ！」

クロスの説明では解らなかった人のために、僕が解りやすくまとめよう。

つまり、ギネス記録より大変でノーベル賞より難しい、ということなんだと思います。確かではありませんが。

「そんなことよりさ、時計見れば分かると思うんだけど、もう二時なんだよね。つまりおやつに近いの」

こんなバカなやりとりをしているうちに、三時間も経過していたらしい。なんだろう、この苦しいまでの空しさは……

「それが？」

「とくに意味はないけど……あ、そうだ。カレー、早く作ろう？」

「うんっ！　じゃあ早く帰ろっかあ！」

そう言つて、元気よくレジへ向かうサンタの少女。僕は慌ててその後ろ姿を追いかける。

常に僕の数メートル前を進むクロス。その歩調に合わせて、さらりと揺れるツインテールと、寒そうな半そでのサンタ服。おかしい少女は、けれど周りの視線は気にならない様子。まったく、のんきなものです。

結局、超奇妙カレーは材料費だけで軽く五千円を越え、僕のお財布はかなり軽くなった。そして足取り重く、荷物も重い帰り道。

「かるしうむ　それは近いみらいの希望　るら　みるく・ちーず・ようぐると　摂り過ぎると　体にものすごい悪影響がでるよ　頭文字を集めればーみちよ　さいてとかしてかあるしうむっ」

クロスが突然意味不明極まりない歌を歌い始めた。乳製品のイメージアップとイメージダウンを同時に歌詞にもりこんだ童謡チックな

曲。

「何、そのものすごい勢いで変な歌はッ!?」

「サントの国でもっともポピュラーなソウルフルな童謡だよ?」

「そんな奇妙で不可解な歌をサントの国の子供達は歌ってるの?」

「ソウルフルのくせに、あんまり感情こもってない気がする」

「そうやって斗助はいつも……………五年前と何ら変わってない」

「待て。五年前はまだ世界は平和だったし、クロスと運悪く出会っちゃったのは昨日のことだよ! 勝手に変な過去を作るなあぁッ

!」

「早く帰ろう?」

思わず立ち止まってしまった僕を(ものすごい力で)小突くと、サントの少女は走り出した。野菜とチーズが大量に詰め込まれた買い物袋は僕が持っている。ちなみにこれ、引きずりたいくらい重い。あまりの重量に体中の間接が悲鳴を上げた。ふらふらと足元が覚束無くなってきた。眩暈がする。吐き気も筋肉痛も腹痛もする。

「待ってクロス……………ちよつと止まってよ……………これすごく重いんですけど……………」

「息が荒いよ? もう疲れるなんて、これだから最近の若者は……………」

「そんなこと言っていないで早く持ってよ!」

腕は引き千切れる寸前までいき、肺は仮停止状態に。僕はあまりの苦しさにその場にパタリと倒れた。

もう、限界。

そして怒りは抑制不可能範囲へ到達、急速に感情を沸騰させる。

アホサントのクロスは「寝てないで早く行くよー」と激しく能天気いい加減こつちも苛立ちを抑えきれない。息を整え、叫ぶ。

「クロス! いい加減にしてよ! 人ん家に勝手に上がりこんできて居候宣言するし、出かけてもドアぶち壊したりして僕に迷惑ばかり掛けるし、さらにその帰り道でも君は荷物も持たないで前を楽しげにあるくだけッ! この……………この役立たず!」

「……………え」

クロスから困惑した雰囲気が零れ落ちる。でも、そんなこと気にしていられないくらい、僕は苛立っている、この侵入者に。人の日常を奪ってそしてさらに人をこき使って……こんな役立たずなサンタじゃ、絶対エターナル見習いだ。そうだ、こんなサンタ……なんて「二度と僕の近くに來ないで……居候なんて絶対いらぬ。不必要なんだよ、我が家には」

別れを告げて、僕は帰路を歩む。買い物袋も居候も全部置いたまま。最初から、全部なかったみたいに置き去りにして。風は一瞬。

聖なる日『クリスマス』。もうサンタの少女とは関わらないようにしよう。勝手に落ちてくるほうが悪いんだから。僕はくるりと踵を返し、走り出す。猫を捨てるような罪悪感が、後ろ髪を引っ張ったけれど、ひたすら前へ進む。

冬の商店街はそろそろ薄暗くなってきた。遠くには一番星が浮かんにはじめた。

夕焼けが冬の空を覆う。

イルミネーションは、やっぱり電球切れで。

時間的に活気が出てきた商店街を一人走った。

不意に思い出されるのは、あのサンタとの出会いと会話。いきなり降ってきた赤い物体。そして居候宣言や珍料理名、ローネちゃんとチーズの話……

「うわあっ！」

前に進んでいるのに、前を見ていなかった僕にトラックが迫る。

避けなきゃ、でも動けない……轢かれる……っ！ 死か大怪我のどちらかを覚悟した刹那、

「さけてとろけてかるしうむ」

あの謎の呪文が聞こえた気がした。

でも、それは絶対に気のせい。だってあのサンタは役立たずの居候で、人のことは考えない自己中心的な見習いサンタだから。

「あ、れ？」

……いつまで経っても痛みは襲ってこなかった。恐る恐る目を開ける。

そこには、ひしゃげて潰れたトラックと、満面の笑みで買い物袋を提げているクロスが立っていた。そいつは、

「ちゃんと前見て歩かなきゃ。それよりばくお腹空いちゃった。早く帰ってカレー作ろう！」

笑顔のまま、言う。

「クロス……怒ってない、の？」

僕の問いに、サンタの少女はきょとんとして首を傾げた。

「だって怒る理由がないもん。斗助は……もう怒ってない？」

「いや、もう」

「うう……あ、あのね……そうだ！　ぼくこれからちゃんとお手伝いするよ？　迷惑掛けないようにがんばるよ？　だから、一緒にいよう？」

「うん、別に構わないよ。僕は」

「じゃあ善は急げ！　家まで競走しよう！」

キンコンカンコンと、どこにでもあるチャイムが商店街に響いた。それを聞いて、サンタの少女がまた、はしゃぎだす。

「金婚冠婚だって！　おもしろいねー」

「ええっ、キンコンカンコンだよ！　なんで漢字にしちゃうの、それを！」

野次馬が募る商店街と一緒に歩く。視線がかなり痛くて、クロスと僕は全力疾走した。やっぱり僕の前にいるクロス。それはそれで、いいかもしれない。

夕焼けはあつという間に夜へと変わっていき、家に着いた頃には星空となっていた。

「まだ五時とちょっとなのになー」

クロスが買い物袋を振り回しながら空を見上げる。そうだね、と答えようとした僕のお腹が、ぎゅるるゝとお行儀の悪い鳴き声をあげ、僕らは笑った。笑いながら玄関をくぐった。

運がよければ、親が許せば、サンタが今日から居候。

「夕飯のカレーはぼくが作るよ」

「え……？　今、なんて？」

「夕飯のカレーはぼくが作るよ」

「ちよつと不安だけどまかせるよ……」

「やったあ！　完成したら呼びに行くから、斗助は二階にいて」

ちよつと、というよりかなり不安だけど、とりあえず二階で待つことに。

待ち続けること三十分。ようやく完成した模様。

「ところで、これ一体何？」

僕はキッチンテーブルに置かれたカレーを見て呟いた。ものすごく不気味な緑色をしているカレーからは、悪臭が漂っている。あきらかにこれはカレーじゃない！

「……ねえクロス、これってカレーだよね？」

「当たり前じゃん」

「何でこんな色してるの？」

「色々工夫したからね」

「うん、その工夫の結果カレーに殺傷能力が備わっちゃったね」

「まあ食べてみなよ」

クロスは自分だけチーズを頬張りながら、僕に殺人カレーを勧めてくる。

「食べるよ……食べればいいんでしょ、食べれば」

空腹で半ばやけになり、スプーンをご飯に差し込む。さく……ぐちゃ、と食欲を削ぐ（カタツムリをつぶした時の）音がした。次いで、

鼻を突く（雀の死体を土に埋めて、二カ月後見に行った時の）悪臭。全身に鳥肌が立つのを感じながら、ゆっくりと銀色のスプーンに乗る緑色のカレーを見詰め直した。

「ていやーっ」

「なにッ？ ……………」

クロスが大声を上げながら僕の口へカレーを押し込む。口内に広がる地獄の味。

大泣きしてもいいでしょうか？

「むぐおう！ ていやーじゃねえよこの野郎！ ……………ごくん。」

つて、ぐえへぎお！ 飲んじやった、飲んじやったよ！ ねえ、ところであれには何が入っていたの？ 地獄の味だったんだけど！」

「大丈夫？ ちなみにねー材料は、キャベツとレタスとサクランボとキウリとメロンとイチゴとレモンと砂糖と黄粉と塩と醤油とチーズとヨーグルトと牛乳と芥子とうどん粉とたらの切り身と抹茶とカタツムリと雀が入ってたんだよ！ あと、シチューのルウ…………」

「今さ、食品以外の単語が入っていた気がするんですけど。しかもシチューのルウ使ったら、カレーじゃなくなるだろ、おい」

空腹は、一番の調味料。らしいのですが、さすがにこれは食べられません。

と、いうわけで緑色の物体はこの後丁寧に処分させていただきました。無駄になってしまった野菜と果物とその他の食品たち（あとカタツムリと雀）に、黙祷を。

今後こいつには何も作らせないようにします。

苦行のような食事を終えた僕たち。何もかもが初体験のサンタクロースは、人間の部屋に大はしゃぎ。僕の身体と精神を全力でつitted。

（食事の後、あの棒状チーズを、手をプルプルとさせながら裂き始めたクロスを全力で止め逆切れされて、蹴られ殴られ首を絞められ

た。そしてチーズを諦めたクロスに『一緒にしりもちをしよう！』と頼まれてそれを拒否。するとまたしてもクロスが逆切れして、額にろうそくを垂らされた。さらにクロスが『勉強机の上に寝たい』と言い出したので厚手のビニールに毛布を敷いてあげた。ついでに漫画を布で包んだまくらも。それなのに、サンタの少女はいつの間にかクロゼットへ侵入。しばらくそこをがさがさと掻き回して衣服を散らかし、結局は勉強机の上で寝た）

そして、ようやく静かになった部屋。

日本の栃木県では、あと数分でクリスマスが終わります。

現在時刻は午後十一時五十分と少し。

僕の勉強机には、ぐっすりと眠るサンタの少女がいる。

久しぶりのクリスマス。

彼女はプレゼントを配達する、という子供たちの夢を守る仕事に僕の家に落下してきた、見習いサンタクロスだ。

サンタが居候している家なんて、ここくらいだろうな……と、ちょっとした優越感（を騙った劣等感）が心に押し寄せた。

「まったく、商店街で迷惑かけないようにする、とか言ってたくせに。ほんと、勝手にわがままなんだから。……おやすみ」
ずれていた毛布を掛け直してあげて、僕も眠りについた。

明日で、両親が帰ってくる。

そんなことも、忘れて。

その3つ！ 落下物と家族会議

次の日、僕は家族会議を開いた。議題は、このサンタクロースをどうするか、である。

卓袱台を囲んで、お茶なんかを啜りながらの会議は、ゆるゆるしすぎていて緊張の欠片もなかった。そのせいか、足を崩し始めるサンタクロース。

「初めまして！ 見習いサンタの、タサン・クロスです！ クロスって呼んでください。好きな食べ物は乳製品で、嫌いな食べ物は豆製品ですつ。身長は百五十センチで、上から八六、六一、八三。得意なことは料理で、苦手なことは長時間集中することですつ 今日から居候させてください！」

やたらと長い自己紹介が終わり、クロスはにへつと微笑んだ。

「いいじゃないか別に。それと美人だし」

この能天気な声は、今年で四十二になるお父さんのもの。

「ええ。明るくなるし、全然構わないわよ？」

そしてこの凜とした声は、今年で三十七になるお母さんのもの。

「許してもらえるのは嬉しいけどさ、もう少し驚こうよ？ サンタクロースだよつ？ 居候だよつ？」

「でも、よかったね。斗助」

「うん……よかったね、クロス」

今日から我が家にはサンタクロース（見習い）が居候。

早速くつろぎ始めたクロスは、たたみの上で寝転がったり、勝手にまんがを持ち出してキッチンテーブルに積み上げていたり、やりたい放題やっている。

「少しは片付けとかやってよねー」

「いやー」

「まったく……クロスの役立たずー」

ずっと前から一緒にいたような感覚。よくはわからないけど、とっ

ても不思議な感じ。

「あ、三時だ！ おやつおやつ」

立ち上がり、食器棚を物色し始めるクロス。戸を開けてスナック菓子を見つけるや、超高速でそれを数袋抱え込む。どんな力で抱えているのか、袋からばりばりと中身が割れていく音がした。

「一緒に食べる？」

「うん、ありがとう」

ごつなごなに砕かれたスナック菓子。けれど、それはそれでおいしかった。

「喉かわいた。飲み物もってきて」

「それくらい自分でやんなよ」

「持ってきて」

「自分でやんなって……ねえなにそのピンク色のとびなわは？ え、ちよつとなんで大上段に構えてるの？ 何する気ツ？ わかった、持ってくるからそれを下ろして」

「やったあ！」

渋々椅子を引き、お菓子を数個片手に掴んでからキッチンへ行く。冷蔵庫からクロスが大好きないちご牛乳を出し、キャラクターもののマグカップへ注ぐ。

「おーそーいー！ 喉乾いた！」

文句を言うサントの少女。まったくもってこいつは役立たずだ。

「今持ってくるからちよつと待ってて」

「えー、いちご牛乳うー？ 今日は普通の牛乳がよかったのにー」

「だったら自分でやればいいじゃん……もう」

その4つ！ 落下物と別れ

「んー斗助え！ 今日には散歩に行きたいー！」

「こんな寒いのに？」

「うん。行こうよー、散歩散歩散歩散歩おー」

というわけで、僕とクロスはマカディミアモンド商店街に行くことにした。

イルミネーションが全て取り外された商店街はどこか殺風景で、より寒く感じられた。けれどクロスはとっても元氣。早速、文房具店を見つけそこに入っていた。

「うっわー！ ここすっごーい！ ねえなんでこんなにキラキラしたものがたくさんなの？」

辺りを見回して目を輝かせるクロス。

「それは多分お店だからじゃないのかな？ そうだ、なにか欲しい物ある？」

「お店！」

即答。相変わらず変な思考だ。

「無理だよクロス、そういう欲しい物じゃなくて、もっと小さな欲しい物だよ！」

「無理じゃないよ！ だってぼく、サンタクロスだもん！ 見習いだけど」

そう言っと、クロスは空中でほとんどステップを踏み始めた。そして、華麗にジャンプ。着地より少し遅れて、巻き上がったスカートが元に戻った。人差し指を回しだす。ってなにする気だ、あのサンタ！？

「さけてとろけてかるしうむ」

白い閃光が店主を直撃。あっという間にセロハンテープへ変身した。

ことん、と鈍い音を立てて床に落ちるセロハンテープ。白い床を転がり、柱に当たって停止した。

「ほら」

一瞬の沈黙。

「ほらじゃねエえっ！こうなったら、逃

げるよクロスッ」

バカサンの手首を掴むと、僕は一目散に文房具店から逃げ出した。もう二度とこいつとは買物に行かない！ 絶対に行かない！

「まったく、クロスはすぐに魔法を使うんだから！ いい、復唱して？ この世界にいる限り魔法は絶対に禁止！」

「この世界がある限り時間は流れる！」

「なくても時間は流れますッ！ とにかく、魔法は使わないこと！ なにがあってもダメ！ ゼッタイ！」

「しかたないなあ……斗助がそう言うなら善処するよ。絶対に使わないよ、魔法は」

真剣な顔で、グッと親指を立てるクロス。ものすごい勢いで信用できない。

しばらくぶらぶらと歩いていたら、文房具店から凄まじい悲鳴が聞こえた。野次馬たちの声からすると、どうやらセロハンテープが勝手に歩いて喋るらしい。

犯人はとくに気にしていない様子。

「あの『質問の多い料理店』って何？」

「レストランだよ。そうだ、今日は商店街を散策しよっか？」

「賛成っ！」

ハイテンションなサンタクロースを引き連れて、とりあえず本屋からまわることにした。まだ人の少ない商店街。

かわいらしいポップな文字で『本屋さんだよん』と書かれた看板を見つけ、早足になる僕。自（分）動（か）してお開けください（と張り紙されたガラスの引き戸を開ければ、本屋特有の甘い香りが暖房と混ざっている空間が。

クロスはそこに並べられる大量の本を見て、さらに興奮。感極まつたというように、僕の名前を連呼した。

「斗助、斗助、斗助、斗助これ、これ欲しい！」

ばひゅつと空気を切り裂いて僕の目の前に差し出されるのは『それゆけ！ サラリーマン』。絶対的大人気児童書……。

「君は何歳だったけ？」

「十四歳」

「今、君が持っているのは何歳の子向けの本かな？」

「五歳だよ？ でも大丈夫。読めるもん」

対象年齢はあまり気にしない様子の十四歳。ちなみに、『それゆけ！ サラリーマン』とは、社会の平和を守りたいと願う、アンパンのように太っていて、つるつばげの中年サラリーマン山田の妄想日記である。小さなお友達に大人気の絵本で、アニメ化したほどだ。

（ばか子）サラリーマン！ 新しい取り引きよ！

（サラリーマン）元気百倍サラリーマン！ 残業パーンチ！

（社長）うわああああ

（リストラされそうだった社員）ありがとう、僕らのサラリーマン！

（サラリーマン）ふはははははははは。では、さらば

びゅーん、サラリーマンは飛んでいきました

（本物の社長）こら、山田くん！ しっかり仕事をしないかね！

（サラリーマンこと田中）ご、ごめんなさい社長！ お願いですから見捨てないください！

「おもしろい、これすんごくおもしろいよ！ 買って買って！」

「まったく、もう少しまともなもの読んだらどうなの。例えば……」

「男の子と女の子 図解 よくわかる体のひみつ、とか？」

につこりと、分厚い本を突きつけてくるクロス。

「やめて、サラリーマン買うからそれをもとの棚に戻して。じゃな

いと変態だと思われる」

……そんなこんなで（便利な言葉です）ようやく本屋を出た僕とクロス。嬉しそうに、それゆけ！ サラリーマンを読みふけるクロスは、歩いている間一言も話さなかった。

「そうだ、クロス」

「ん？」

ようやく、ふいっと本から顔をあげるクロス。

ぽんぽんつきの帽子もその動きと一緒に上を向く。

「これ、さっきの本屋で買ったんだけどね、クロスいつも同じ色の服でしょ？ だからさ、青いミサンガ。これつけてみて？」

そっと、紙袋に包まれた紐を渡す。クロスは、うわぁと喜んでそれを受け取った。わしゃわしゃと紙が千切られる音。

「ね、ここ結んで？」

細くて真っ白い腕に、水色のミサンガが絡んでいる。でも、それは両端が繋がっていなくて。

「これをつけている間は、不思議な力を使っちゃダメって約束ね？」

……………はい、これでよし。きつくはない？」

「ちようどいいよ！ ありがと」

腕を虚空へ伸ばし、左右に振ってみせるクロス。赤いサンタ服に水色のミサンガ、と似合わなすぎる色あわせだったけど、それでもそれは綺麗だった。真っ白な腕に結ばれた水色の紐……それは、クロスがこの世界にいる証。

「クロス、今日は家に帰ろうか……ね」

「うんッ！」

「……お待ちなさい、ジャステイリア・タサン・クロス。サンタの国より迎えに参りました。さあサンタの国へ帰りましょう」

突然、後ろから掛かる不気味なほど澄みきった声。

振り向けばそこには、長身痩躯で暗銀色の長い髪を垂らす美人な女性がいた。その人は、人差し指と親指で赤い輪ゴムをつまんでいる。

やはりサンタ服なその女性は、ジャステイリア・タサン・クロスによく似ていた。

ごくりと息を飲み、身を硬くして僕の後ろに隠れるジャステイリア・タサン・クロス。

長い……………やっぱりクロスそのままいいや。

「いや、帰らない！　だつてぼくはここにいないといけなんだもん！」

迎えに来た？　つてことはクロスが帰る？　せつかく居候が許可されたのに？　今更？

「誰……………ですか？」

「申し遅れました。わたくし、サンタの国クリスマス総合会議の議長を務めます、ジャステイリア・タサン・リリスと申します」

「お姉ちゃん！　なんで、なんで来たの？」

「お姉ちゃんツ！？　確かによく似てるけど、まさか本当に」

「迎えに、来たのです。それと……………わたくしは議長です」

クロスの姉らしいリリスは、冷たい視線で僕を眊め見た。

その途端、ぱしゅつとリリスが持っていた輪ゴムが伸び、クロスを捕らえる。動きを封じられたクロスは、なにか叫びながら辺りに真っ赤な光を撒き散らし、右手に赤いとびなわを顕現させた。

「そんなものでわたくしに勝とうと？」

壮絶な姉妹喧嘩の火蓋が切つて落とされた。

「くつ……………えいつ」

クロスは輪ゴムを引きちぎると軽やかに跳躍し、距離をとった。そして右手を空中で振れば、直線に伸びていくとびなわ。それを紙一重で避けたリリスは両手で輪ゴムを挟み、クロスの後ろにあるコンクリートの壁目掛けて投擲した。そして姿勢を低くして後退。

直後、クロスの後ろにあった壁が弾けとんだ。

「どうなってるの？　クロス！」

「斗助？　ぼく、サンタの力を使わないうって約束したのに……………ごめんね？　先に帰つてて。ぼくも必ず帰るから……………」

「クロス、あなたは帰させませんよ」

「また後でね斗助。えええいつ！」

声を上げ、とびなわを振り回しながら突進していくクロス。リリースは輪ゴムを指に絡め、シールドを作る。

「てやあっ」

しかしクロスは、とびなわをシールドに当てる寸前で引いた。打撃対象を失ったとびなわは威力を保ったまま、地面に転がっていたコンクリートに直撃。超重量の塊を空高く舞い上げた。

刹那、轟音が空気を駆け、振動が地面を走った。

砂煙を撒き散らしながら砕け散るコンクリートの塊。辺りは一瞬にして、真っ白な世界へと変わった。その奥に揺れる、赤い色。

見紛うはずがない。間違いなく、あれはクロスだ。

「クロス、一緒に帰ろう」

「ううん先に帰ってて。ぼくは必ず戻るよ？」

なにかを堪えたように細かく震えている、やっぱりものすごい勢いで信用できない声で、彼女は呟いた。

それはまるで、独り言。

切なくて、苦しくて、もう二度とクロスに会えないかもしれないという思いが、さらに胸を締め付ける。

「必ず戻ってきてね……」

それしか、言えないから。

「うん、約束する」

これが最後の約束になるかもしれない。

姉の攻撃を、避けることも防ぐこともできなくなったクロスは、諦念を表情に載せ、その場に座り込んだ。

「……先に帰るなんて、できないよ！　ずっと僕と一緒にいよう？」

「う、ん。しかたがなく、善処、してあげる、ん……だから」

「ありがとう、クロス」

微笑して、ぐったりとした四肢を地面に突き立てるクロス。そのままぱつと跳躍し、虚空に立つと専用武器であるとびなわを顕現させた。

想うのは、存在のみ。

人間の世界は、想像するほど綺麗な場所じゃなかったよ。

でもね、あなたがいてくれたんだ。

認めてくれる、優しい君がいたの……。

だから、ここで消えるわけにはいかない。

最後の力を使い、クロスはとびなわを振り上げた。もうリリスがどこにいるかなんて分からなかったけれど、すべてをとびなわに委ねて、ひたすら振った。

虚空を切り、風を唸らせ、けれどリリスにそれは当たらない。力が尽きる直前

打撃の感触。

そして、リリスの悲鳴。

なにかが途切れたような、沈黙。

雨が降り始めた。

クロスの霞む視界に、血を流しながらも、しっかりと立っているリリスが見えた。

「帰るんです……」

かすれてしまった姉の声。クロスから、一切の力が抜け落ちた。

それを待っていたかのように、血でぬらりと光る輪ゴムがクロスと斗助を拘束する。

「大丈夫です、斗助さん。クロスやわたくしたちサンタに関わる記憶は全て消えますから。では、さようなら」

いやだ、と叫ぼうとするクロス。けれど喉が渴いてしまい、声が出ない。

涙が唇を濡らし、舌を潤す。

最後の言葉を紡ぐため。

「やだ、忘れられたくない！ 忘れないで、忘れないで、絶対に

一緒だよっ！ だから忘れちゃいや！」

そして

その5つ！ 落下物と……

気がついたら僕は、自室で寝転んでいた。

必死に記憶を辿っても、思い出されることは何一つない。ただ、大切ななにかが消えてしまったという苦しみだけが残っている。

手には、ぼろぼろのピンク色をしたとびなわが一つ。

「なんだろ、これ？」

白い持ち手の部分に、かわいらしい文字で『クロス』と書かれていた。

クロス……どこかで聞いたような気がする。

「まあそんな単語はどこでも聞かし、別に普通か」

夕焼けが窓から零れ落ち、部屋を優しく暖める。

「斗助！夕ご飯できたわよー」

ドアの向こうで響く声に、はいと一言返事をする、僕はとびなわを引き出しにしまって部屋を出た。

それから僕は、普通の中学三年生として生活していった。

心になにか痞えるものを残したまま。

十二月の下旬、木曜日の朝。

「おはよう、斗助くん」

ツインテールの彼女は、今年一緒のクラスになった女の子で、僕の隣の席に座っている。

そして、片思いの相手でもある。

「あ、おはよう深黎ちゃん」

「早くしないと、ほら、斗助くん日直でしょ？ だからさ」

「うわ、忘れてた！ ありがと」

「まったくもー。ふふっ、仕方ないから私が手伝ってあげようか？」

ウィンクしながら微笑を見せる深黎ちゃんに僕の心臓は早鐘のこ
く高速で血液を送り出す。

「いいのツ？ 助かるよ」

「今日だけ、特別だよ？」

「うん」

早く早くーと笑いながら、先を進む深黎ちゃん。ふつと心に幸せが
灯る。それはそう、彼女の笑い方が、とても大切ななにかによく似
ていたから。

カバンを掴んだまま、花に水をあげる。行きたい高校なんかの他愛
もない会話を繰り返し、話題が途切れた頃。

「そう言えば、明後日ってクリスマス・イブじゃない」

「ああ！ そうだね」

「もしよかったら、一緒にどこか行かない？」

突然の誘い。どうしようか迷うふりをしながらけれどもう結論は出
ている。

「一緒に行きたい。……………一緒に」

「うん、それいいね！ じゃあ予定が空いてたら連絡するよ」

「よろしくね。忘れないですよ？」

「もちろん、忘れないよ」

自分で言った言葉が、ずきつと胸を刺した。なんでだろう？ やっ
ぱり僕はなにかを忘れている？ 気のせいだよね。

胸に痞えるこの感覚も、全部全部気のせいなんだよね……

エピソード

今日はクリスマス・イブ。

深黎ちゃんの誘いを断って、僕は一人家にいた。よくは解らないけど、どうしても家にいたかったから。

「家にいたいからいるって……なんだか開き直った引きこもりみたいだな……」

ベランダに出てみれば、聖夜前に相応しい澄み切った風に、透明な夜空が視界を埋める。そこに浮かぶ数多の星と、ひっそりと光を放つ三日月が、暗いだけの夜空を優しく彩って。

冬休みの序盤、僕はまったく進まない宿題を放置、毎日をだらだらと過ごしている。

ふと、終業式以来会っていないクラスメイトのことが頭に浮かんだ。あまりの寒さに、部屋に戻りそうになった。けれど、どうしてもここにいなければいけないような気がする。

首を振り、視線を空へと戻す。そこには相変わらず闇とわずかな光があった。

「あ……」

今、ほんのちよっぴりだけ切なくなったのはどうしてだろう？――瞬、誰かが心の中で微笑んだような気がした。

「ふう」

肺に溜まった息をそっと吐き出せば、それは真っ白く凍り付いてずっと闇へ溶け消える。

現在時刻は午後九時半。

まだ雪が降らないこの地域。いつもクリスマス三日前まではイルミネーションが輝いているのに、当日になると一斉に電球が切れる商店街。そしてその代わりと言わんばかりに点滅を開始する街路灯。毎年同じで、いつまでも変わらないこの風景に涙さえ感じてしまう。

感じてしまっけれど、そろそろ町を見下ろすのに飽きてきた。

また、闇を見上げる。

視界には、空気が澄み渡っている夜空がさっきと変わらず広がっている。切なさを混ぜた視線を遠くへ投げれば、薄っすらとした山の輪郭が見えた。今は闇と同化した濃緑の山。午前では見られない新しい木々の姿は、威風堂々としていても感動する。風が吹き、思い出したように寒さが体中を駆け、ぶわっと鳥肌を作った。

綺麗な夜空、濃緑の山。そこに、どこか懐かしい真紅の物体が浮かんでいる。

あれはなんだろう？

とても優しい記憶に、しばらく言葉を失った。

沈黙の中、謎の物体は落下を続行。僕と未確認浮遊物体との間隔は、わずか数十メートルまで縮んだ。

そしてあと三十メートル、二十三メートル、十五メートル

「たっだいま

！」

僕の中で、何かがはじけた。
開かれる記憶の扉。

そう、彼女の名前はクロス。

一年前に振ってきた、サントの少女だ。

魔法を使ったり、とびなわで戦ったりと、ちょっと不思議な女の子。そして、我が家のとっても大切な

「おかえり、クロス！」

居候でもある。

また、楽しい生活が始まった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3583c/>

聖なる夜と落とし者っ！

2010年11月17日14時21分発行